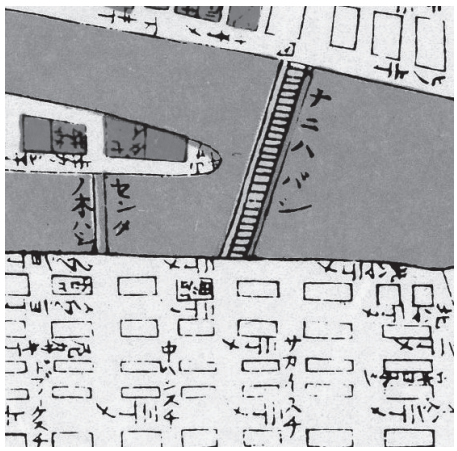
五頭目の謎のライオンが和歌山に

架け替えは市電のため

水都大阪を象徴する中之島には数々の名橋が架かる。“ライオン橋”の異名をもつ難波橋（なにわばし）はその代表であろう。現状で北浜と西天満の堺筋に架かり、途中に中之島を挟んで全長は189.7m、幅は21.8mある。

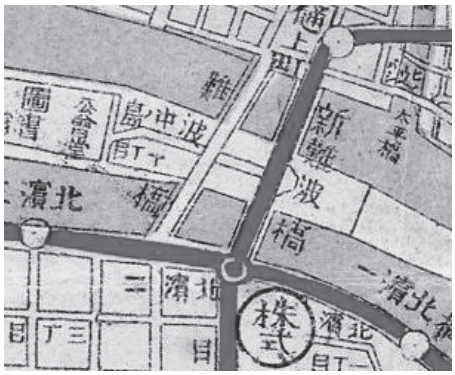
このあたりには、早くも8世紀初め頃に行基により橋が架けられていたと伝えられる。しかし有名なのは、江戸時代の「浪花百景」に天神橋、天満橋とともに「三大橋」として描かれた難波橋である。幕末の中之島の東の端は「山崎の端」と呼ばれ、陸地は現在のように天神橋どころか難波橋にも達せず、難波橋は川幅の広い大川をひとまたぎしていた。幕府管理の公儀橋で、橋の南側は、現在のように堺筋ではなく一本西側の南北の通り、いわゆる「難波橋筋」に架けられ、長さ108間（約207m）もの大型の反り橋として構造的に中央部が高く、真ん中は展望台のように眺望が開けていた。



弘化2（1845）年の古地図。難波橋がさかいすじの一つ西に架かっている。中之島もまだ難波橋まで陸地になっていないことが分かる。

また、与謝蕪村の有名な「春風馬堤曲」には、「梅は白し浪花橋辺財主の家」として登場し、鴻池善右ヱ門や十兵衛横町の天王寺屋五兵衛と平野屋五兵衛など富裕な商家が、あたり周辺に多かったことを示している。

明治9（1876）年に鉄橋に架け替えられたころに中之島は上流に拡張され、難波橋は中之島を跨ぐようになる。現在の橋は、昭和50（1975）年の大改修で戦時中に金属供出で失われた欄干や橋上灯が復元されているが、もとは大正4（1915）年に架け替えられたものである。このとき天神橋筋六丁目まで延伸される市電敷設の反対運動が地元で起こったため、一筋東の堺筋に市電を通し、新しい難波橋が堺筋に架けられることになった。パリのセーヌ川に架かるヌフ橋とアレクサンドル3世橋を参考にしたとされるモダンな橋梁で、親柱には市章の「みおつくし」



架けかえ直後の「大阪市地図」。「新難波橋」と記されているのが現在の難波橋。その西に今はない古い難波橋も記されている。

がデザインされた。渡り初め式の様子は、大阪の南画家である森琴石（もりきんせき）（1843〜1921）が描いた絵の下図から想像できる。戦前の大阪の最盛期、“大大阪”時代を代表する名橋である。

この時に難波橋に置かれたのが、「ライオン橋」の異名の由来となったライオンの石像である。黒雲母花崗岩を用いて彫られ、仁王像のように口を開けた阿形と閉じた吽形の二頭セットが橋の南詰と北詰に置かれ、つごう四頭の像が橋を護っている。作者は、兵庫県三田に生まれ、東京美術学校（現東京藝術大学）に学んで大阪で活躍した天岡均一（あまおかきんいち）（1875〜1924）で、証券取引所前の五代友厚像と向かいあう情景は、かつての大阪経済の強さを象徴するかのようだ。また、面白いことに大阪歴史博物館の村越幹夫主任学芸員によると、相場師として成功し、「北浜の太閤」と呼ばれた松井伊助（1865〜1931）が故郷和歌山に建てた別荘六三園（現在は、がんこ和歌山六三園）には、難波橋とまったく同じ形、サイズのライオン像があるという。そこにある理由は詳らかではないが、北浜ゆかりの相場師らしい剛毅な話である。

中之島には、「大阪ビルディング（現ダイビル本館）」外壁に近代大阪を代表するもう一人の彫刻家大国貞蔵（おおくにていぞう）の《鷲と少女の像》があるし、フェスティバルタワー外壁の陶板レリーフや府立中之島図書館の北村西望の彫刻、中央公会堂の屋根のメルクリウスとミネルヴァ像などもあり、橋巡りをしながらちょっとした彫刻見学ツアーが組める。

トラでないのが残念だという阪神ファンも、難波橋のライオンの偉容には大阪の誇りとして脱帽するのではないだろうか。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。